

キリシタン時代 驚きの国ニッポン

東光博英

2012年に放送されたNHK大河ドラマ「平清盛」は、時代考証に基づくリアルな映像が注目を集めた。ところがその埃^{ほこり}っぽい映像に、ドラマの舞台である兵庫県の知事が観光に及ぼす影響を心配してか、画面が汚いと批判して話題になった。昔は道路が舗装されていないから埃が舞うのは道理である。年代は異なるが、西欧人が初めて来日した16世紀は、彼らと共にキリスト教が伝来したのでキリシタンの時代とも呼ばれる。日本史上では戦国時代末期から天下人の時代にあたる。戦火の絶えない乱世であるから、さぞかし埃に満ちていたことであろう。実際に西欧人はどのような印象を抱いていたのか。彼らの記録を見ると、意外にも「清潔」であった。彼らの多くがポルトガル語で日本はlimpo（清潔）だと、驚嘆と称賛の言葉をもって記している。日本各地を巡り様々な人と接したキリスト教宣教師らが本国に書き送った報告書には、特に建築物（城、寺院、民家、座敷、茶室、厨房、風呂、馬屋）や生活様式（畳と靴を脱ぐこと）、食事（食べ方、膳、接待）、そして衣服と身なりが清潔だとの記述が多くあり、たいてい「きわめて」とか「驚くほど」の強調語が添えられている。彼らは西欧キリスト教世界を人類で最善最高の文明と信じていたから、最果ての国でそれほどの清潔さを見出すとは夢にも思わなかったのであろう。著名な宣教師ルイス・フロイスは「かつて私が見た中で最も清潔かつ爽快にして優雅である。ポルトガルや全インドにも、精巧、清潔、優雅の点でこれらに並ぶる家屋を見た覚えがない」と母国よりも高く評価した。また別の神父も「日本が清潔であることは想像もつかないほど」と言い、織田信長の邸を訪れた時、新しい靴でなければ入れず、部屋を通る際には後ろから箒を持った人が掃きながらついてきたことや、「信長が一室にあった果物の皮

を掃かなかつた娘を殺したことは驚くに当たらない。なぜなら、彼は清潔であることに非常に熱意を注いでおり、不潔はすべて大罪となるからである」と説く。この神父には日本の清潔さは異常なまでの潔癖によるものと感じられたに違いない。しかし、日本の文化や習慣に精通していたジョアン・ロドリゲス神父は著書『日本教会史』で、日本人は外面の美しさを非常に重んじて多大の注意を払うのであり、平素から邸をすべて清潔に保つのは不意の来客があっても客人を然るべくもてなすための礼法であると論じている。そのため邸の外部や庭、門前の道路に至るまで掃除をする係の者がおり、室内については彼らより身分の重く教養ある人々がいっそう注意深く掃除をするという。この掃除に関して、前述のフロイスは著書『日欧文化比較』の中で、「われらにおいては、貴人が自分の部屋を掃除するのは卑しいことであろう。日本の貴人たちは、そうするのが習慣であり、彼らの間ではそれを立派なこととみなしている」と指摘する。これによれば、フロイスは自分たちと日本人とでは掃除に対する考え方が大きく異なるというだけでなく、その背後に日本独自の価値観があることにも気づいていたと思われる。もっとも同書ではそれ以上解説していないので詳細は不明ながら、少なくとも日本の清潔さが単なるきれい好きに由来するものでないことは理解していたはずである。それから遙かに400年以上を経た今、わが国を訪れる外国人から同じように清潔さともてなしに対する驚嘆と称賛の声をしばしば耳にするのは興味深い。そこにはキリシタン時代と相通ずるもてなしと「掃除の文化」があるように思う。ただし、ほとんどの宣教師は実のところ、西欧と全く異なる日本の価値観や習慣、複雑な礼法に甚だ困惑していたのであり、牛肉を嫌い生魚を好む当時の料理を苦痛とともに堪え忍んだ。現代の外国人が世界遺産に認定された和食に喜々として舌鼓をうち、日本の文化を存分に楽しむ様子とはいとも対照的である。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)